

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第
号	号	

氏名
論文題目

三上 仁志

Readiness, Language Contact, and Oral Performance
Development During a Study-Abroad Program

留学環境における口頭技能の発達に渡航以前の準備の程度と
留学中の言語接触が与える影響について

論文審査担当者

主査

名古屋大学 教授 木下 徹

委員 名古屋大学 教授 山下 淳子

委員 名古屋大学 教授 尾関 修治

論文審査の結果の要旨

I. 論文の構成と概要

本論考は、母語が日本語である大学レベルの英語学習者が、一定期間の留学の後に示す口頭による英語運用能力の伸長に対して、留学以前の準備の段階における、文法的知識と、International Posture (国際志向性)と呼ばれるタイプで代表される動機づけという、2種類のレディネスが与える影響とそのメカニズムを、実験参加者の留学中の自発的言語接触を媒介として捉えることにより、解明しようとしたものである。

本論考は、第1章の「序章」から、第13章の「結論」までの章と、参考文献、及び、巻末資料からできている。そのうち、後述する研究課題の主として課題1から3までを扱う第3章から第7章までをパート1、課題4と5を扱う第8章から第11章までをパート2として、内部を大きく2部に区分する構成が取られている。

より具体的には、パート1で、留学前のレディネスが、現地での教室外での自主的な目標言語との接触活動の全体量を規定し、それが、目標言語でのオーラルパフォーマンスに影響を与えるというモデルを想定する一方、パート2では、準備段階のレディネスが、現地での目標言語による4技能別の活動量に影響し、次の段階として、それら技能別の活動量が、発話技能の向上の程度に影響を与えるというモデルを想定している。この2つのモデルを、量的データには回帰分析を、インタビューを中心とする質的データには質的分析をそれぞれ用いることで検証している。

章別構成としては、まず、第1章では、関連する先行研究の系譜を総括した後、本研究の研究課題を導入し、特にその焦点部分を概観している。第2章は、研究課題について詳述している。研究課題は、(1)本研究で問題にするような口頭運用力の進展に有意な影響を与える留学期間としてはどの位の期間が必要であるか、(2)留学前の文法知識と International Posture は、複合効果として自発的言語接触の全体に影響するか、(3)自発的言語接触は、口頭運用能力の伸びに影響するか、(4)文法力と International Posture は自発的言語接触の4技能の個々の分野に影響するか、及び、(5)自発的言語接触の個々の技能は、口頭運用力に影響するか等、5つに整理されている。

パート1である第3章から第7章までは、主として上述した研究課題のうち1から3を扱う。まず、第3章はパート1の方法論であり、参加者、留学プログラムのデザイン、調査計画の全体像と使用する材料の記述等を説明している。第4章、5章は結果を研究課題1, 2, 3に対応させて報告し、第6章でも、結果を課題ごとに記述している。パート1の最後にあたる第7章で結果の持つ教育的示唆について論じている。

パート1の構成を踏襲する形で、パート2である第8章から第11章は研究課題4, 5に対する調査とその結果、考察、及び教育的示唆を、それぞれ扱っている。第12章は、パート1とパート2を総合する形で、全体としての考察を加えている。最後に第13章が本論考全体の結論となっている。

本論考の主な結果の1つは、幾つかの先行研究の示唆する方向と同様に、事前の文法知識と International Posture が、留学プログラムに参加した学習者の自発的言語接触の全体的な程度

論文審査の結果の要旨

に影響し、その言語接触が口頭運用力の伸びに影響を与えているというものである。一方、個別技能別でみた場合は、初期段階のレディネスは、特に Listening と Speaking における言語接触到に相対的に強い影響を与え、その後、Speaking における自発的接触が口頭運用力の伸長に直接的な影響を与えていると報告している。あわせて、International Posture は、パート2の現地目標言語の各個別技能別でみた場合の影響力が、パート1の全体的な活動量への影響力と比較して相対的に縮小していると指摘している。

II. 評価

積極的に評価すべき点として以下の諸点を挙げることができる。

(1) 留学が目標言語における口頭運用能力の向上に効果的であるということは、直観的、経験的には支持されやすい主張であるが、これを、実証的に検証した研究は意外に少ない。特に、事前の文法力と動機づけが、具体的にどのようなプロセスを経て、現地での言語学習の進展に影響するのかについては未解明の部分が大きかった点に関して、媒介項としての自発的目標言語接触を、全体とした場合と個別技能別に分離した場合に分けて、それぞれにおける口頭運用力の向上度への影響を、先行する研究に基づくモデルを設定して検証した点は高く評価できる。

(2) 結果の解釈において、モデルが支持された部分のみならず、動機づけの影響が、全体として見た場合より個別技能別にみた場合、総じて縮小しているように見えるという、考えようによってはやや意外な現象についても、指標の domain specificity という観点から説得力のある考察を展開している。

(3) 現実の種々の制約の下で、できる限り綿密に計画され、かつサンプル数もこの種の研究としては相当大規模といえる数を集めるなど、時間と手間のかかる調査を行なっていることも評価される。全体としての調査手法自体が先行研究を充分踏まえて設計されたものであり、これ自体、今後価値を増すものと期待される。海外研修参加者という調査協力者の状況が非常に多様なものであることは容易に想像され、にもかかわらず、そこから妥当と思われる分析結果を導き出すことができたのは今回の調査方法の全体としての優秀さによるものと思われる。

(4) 同様に、測定手段としても、事前と事後の口頭運用力の向上度の判定には TOEFL-iBT、動機づけには、八島の International Posture の質問紙、目標言語接触の活動量指標には Language Contact Profile を用いる等、いずれもこの分野で定評のあるツールを用い、得られたデータの統計処理についても、分析の前提となる条件の検討や変数の正規化をはじめとする適切な処理を行っている。

(5) 本研究は、留学の事前準備とその効果に関して、将来、民間等のしかるべき機関との共同による、より規模の大きな研究にもつながる可能性もあり、広く社会的貢献という面でも期待できる。

以上のような、評価すべき点を有する本研究であるが、以下の様な、改善の余地があると思われる点もある。

(1) 使用されているいくつかの類似する用語の定義と相互の異同がやや曖昧ないしはわかり

論文審査の結果の要旨

にくい。(例として、knowledge proceduralization と automatization、 functional knowledge of grammar と usable grammar rules 等)

(2) 本研究では、目標言語における言語接触に関する測定変数として、主に接触時間を用いているが、時間ではなく、接触量(例、Reading における読書ページ数や総語数等)や、接触強度といった観点を取りこんだ場合、今回の結論が必ずしも維持されるとは限らない可能性がある。

(3) 本研究では、動機づけとしての International Posture に関して、各技能に関する domain specific な指標を使用していない。その様な指標を用いた場合と比べて、得られた個別技能に関する動機づけの影響の推定精度は低いと言わざるを得ない。

(4) サンプリングの方法として、本研究では snow-ball method を用いている。実験参加者を確保するための現実的方法としての有用性はもちろん認められるが、その一方で、母集団の代表性という点では、潜在的なリスクがある。

(5) eメール等のコミュニケーションの代替手段としてのオンラインコミュニケーションがこういった調査でどのように評価されるかという点についても、今後、より踏み込んだ調査が望まれる。

以上のような改善すべき点はあるが、それらは、本論文の価値を著しく損ねるという類ではない。その一部は筆者も本研究の限界として自覚しており、将来の課題、あるいは展望として、ある程度言及している。

総合的に判断して、本研究は博士の学位を認定するべき要件を十分備えていると思われる。